

後原遺跡 7

—第 26 次調査—

大野城市文化財調査報告書 第 213 集

2024

大野城市

うしろ ぼる
後原遺跡 7

—第26次調査—

大野城市文化財調査報告書 第213集



2024

大野城市

序

福岡県大野城市は、福岡平野南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と自然に囲まれた緑豊かな街です。市域は南北に長く、大野城跡、水城跡、牛頸須恵器窯跡の 3 つの国史跡をはじめ、多くの文化財があります。

後原遺跡は大野城市のほぼ中央、白木原一丁目に位置し、これまでの調査の結果、江戸時代の白木原村の一部にあたることが分かっています。

今回報告する第 26 次調査では、集落西側の土地利用の様子を明らかにすることができました。今後こうした成果を積み重ねていくことで、ふるさとの先人たちの暮らしぶりが明らかになるとともに、今に生きる私たちが地域の歴史の積み重ねの上にあることを知る機会となることを期待しています。

本書が学術研究はもとより、広く一般に活用され、地域歴史の解明や歴史教育の一助となり、文化財愛護の精神を醸成する手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりご理解とご協力をいただきました関係者各位に対しまして、厚くお礼を申し上げます。

令和 6 年 3 月 31 日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例言

1. 本書は、2022年度に大野城市が住宅建設に伴って発掘調査を行った「後原遺跡第26次調査」の成果報告書である。
2. 発掘調査は、住友不動産株式会社、エヌ・ティ・ティ都市開発株式会社より委託を受け、大野城市が行った。
3. 発掘調査は齋藤明日香が担当した。
4. 遺物写真は株式会社写測エンジニアリングに委託し、牛嶋茂が撮影した。
5. 遺構実測図中の方位は座標北を表し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
6. 遺物実測図は小嶋のり子が作成した。
7. 図面の浄書は小嶋が行った。
8. 遺物観察表は小嶋が作成した。また、遺物は総番号とし、挿図と図版で統一している。
9. 本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院発行の1/25,000電子地形図を使用し、各市の遺跡包蔵地分布図をもとに作成した。
10. 本書に使用する土色名は『新版標準土色帳』農林水産省技術会事務局監修を使用している。
11. 本書の執筆は澤田・龍、編集は龍が行った。
12. 本書に掲載した遺物・実測図・写真はすべて大野城心のふるさと館が管理・保管している。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	6
IV. まとめ	7

挿図目次

第1図	既往調査区配置図 (1/2,000)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	調査区遺構配置図 (1/200)	5
第4図	SD01 東壁土層図 (1/40)	6
第5図	出土遺物実測図 (1/3)	6
第6図	後原遺跡土地利用概略図 (縮尺不同)	8

表目次

第1表	出土遺物観察表	8
-----	---------	---

写真図版

図版1	(1) 調査区全景 (西から)	(2) 調査区全景 (北西から)
図版2	(1) 調査区北半完掘状況 (南から)	(2) 調査区南半完掘状況 (南から)
図版3	(1) SD01 完掘状況 (西から)	(2) SD01 完掘状況 (東から)
図版4	(1) SD01 東壁土層堆積状況	(2) 調査風景
	(3) 出土遺物写真	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

後原遺跡は大野都市の中央部に程近い白木原一丁目を中心に広がる遺跡である。これまで26回にわたる調査が行われ、近世の集落跡や喪棺墓群を中心とした遺構が確認されている。

本報告地は白木原一丁目280番1に所在し、住友不動産株式会社の照会を受け令和3年7月7日～8日に確認調査を実施したところ、地表下70～100cmの深さで遺構が確認された。その後施工業者であるエヌ・ティ・ティ都市開発株式会社により集合住宅建設の計画が提示され、計画通りに施工されれば遺構が破壊されることから遺構保護の協議を行ったものの、設計変更は困難であり、発掘調査を行う必要があると判断された。

事業者からは令和3年10月27日に埋蔵文化財発掘調査依頼書・承諾書が提出され、令和3年10月27日付けで建設予定図を添えて発掘届を福岡県教育長宛に提出したところ、令和3年11月5日付けで発掘調査を実施する旨指示が出された。調査については住友不動産株式会社、エヌ・ティ・ティ都市開発株式会社、大野都市の三者で契約を結ぶこととし、令和4年度に発掘調査、令和5年度に整理作業を実施することで協議が整った。

発掘調査は令和4年8月16日から令和4年11月25日までの期間実施した。また調査は開発面積3013.78㎡中約1400㎡について行い、費用は事業者、施工者が負担した。

発掘調査の実施・報告書作成に際し、多大なるご理解を頂いた関係者の皆様には、記して感謝の意を述べたい。

2. 調査体制

令和4年度（発掘調査）

大野城市長	井本 宗司
大野城心のふるさと館長	赤司 善彦
大野都市地域創造部長	増山 竜彦
心のふるさと館文化財担当課長	石木 秀啓
係長	林 潤也、上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫、石川 健
（庶務）	小川 久典、清水 康彰、大塚 健三
（現場作業）	白石 公德、篠原 城道、瀧間 正志、関谷 文規、 中村 力夫、手島 勇、飯田 俊子、穴井 淳子、 上原 尚子、江藤 とし子
（事務補助）	山上 恵子、井之口 彩子

令和5年度（整理作業・報告書作成）

大野城市長

大野城心のふるさと館長

大野城市地域創造部長

心のふるさと館文化財担当課長

係長

主査

主任主事

主任技師

会計年度任用職員

（調査）

（庶務）

（整理作業）

（事務補助）

井本 宗司

赤司 善彦

日野 和弘

石木 秀啓

林 潤也、上田 龍児

濱田 裕之（～令和5年6月）

下川 みお（令和5年7月～）

龍 友紀、山元 瞭平

澤田 康夫、石川 健

清水 康彰、藤田 香

仲村 美幸、小嶋 のり子、古賀 栄子、

篠田 千恵子、小畑 貴子、津田 りえ、

水室 優、松本 友里江、眞田 萌世

井之口 彩子、西村 恭子



第1図 既往調査区配置図（1/2,000）

Ⅱ．位置と環境

福岡県大野城市は福岡平野の南東部に位置し、南北に細長い瓢箪形の市域をなす。市域の北側には井野山・乙金山・四王寺山、南側には牛頸山とそこから派生する丘陵が広がる、山に囲まれた地形である。市北部から中央の平野部には宝満山を水源とする御笠川が流れ、市の中央部で南部から流れる牛頸川と合流して博多湾に注いでいる。平野部から山裾にかけては縄文時代以降多くの遺跡が分布しており、山に囲まれた地形にあって平野や河川は古くから交通路として機能していた。

後原遺跡は市域のほぼ中央、牛頸川と御笠川の合流地点から1kmほど南に位置しており、両河川が生み出した沖積平野上に営まれている。古くから宅地化が進んでおり、現在でも交通の利便性の高さから盛んに開発が進められている地域である。そのため旧地形はそのほとんどが失われてしまっているが、昭和の初期頃までは一部が小高い丘となっており、現在よりも地表が数メートルほど高かったと言われている。後原遺跡はこれまでに26地点で発掘調査が行われており、縄文時代から近世に至るまでの遺構・遺物が出土している。以下に各時代の周辺遺跡を概観したい。

市域平野部では沖積地が広がっていることもあり、縄文時代の遺跡は後原遺跡周辺では部分的にしか残存していない。台地上にある本堂遺跡や石勾遺跡で縄文早期の遺物、また丘陵上の薬師の森遺跡で落とし穴や遺物が確認されているほか、前期から中期にかけて春日公園内遺跡、後期から晩期にかけて薬師の森遺跡や九州大学筑紫地区遺跡などで遺構・遺物が確認されている。

弥生時代に入ると、市域北部の丘陵と御笠川周辺の平野部を中心に遺跡が展開し、数も増加していく。前期には御笠川に程近い仲島遺跡や川原遺跡、石勾遺跡などで集落が営まれ、御笠川東岸に近い月隈丘陵上で金隈遺跡や御陵前ノ椽遺跡、また周辺の低丘陵上に中・寺尾遺跡や塚口遺跡などの墓地在営される。中期には北部丘陵上の森園遺跡の他、南側の九州大学筑紫地区遺跡などで新たに集落や墓が営まれ、西側の春日丘陵に大規模な集落・墓域が展開する。瑞穂遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期に繋がる集団墓が営まれており、墓制の変遷をみる上で興味深い。

古墳時代には三角縁神獣鏡が出土したと伝えられる御陵古墳や、中期の笹原古墳、成屋形古墳など地域の盟主とみられる古墳が点在する。後期には薬師の森遺跡など市内各地で集落が営まれるほか、丘陵上に多くの群集墳が形成される。生産活動では、6世紀以降牛頸須恵器窯跡群が操業をはじめ、大宰府が隆盛する奈良時代にかけて全盛期を迎え、窯跡数が推計で600基にも上る一大生産地となる。しかし、律令国家が衰退する9世紀以降には周辺でも遺跡が減少し、9世紀の半ばには牛頸須恵器窯跡も終焉を迎える。その後中都市部「博多」が対外交易の拠点となると、御笠川周辺で再び遺跡が増加するとともに、11世紀後半以降は丘陵部の開発が進んで新たな集落が各地で営まれるようになる。集落では御笠の森遺跡で11世紀から12世紀後半にかけての遺構が確認されているほか、薬師の森遺跡、上園遺跡、天神田遺跡、小水城周辺遺跡などで瓦器やその生産関連遺構・遺物が出土しており、集落単位で盛んに瓦器生産が行われたことが伺える。

江戸時代には、周辺は『筑前国統風土記拾遺』に記載のある白木原村の一集落「本村」にあたることされ、現在の地祇神社周辺に、屋敷跡や区画溝、豊棺墓地在が広がったことが確認されている。

近代においては、太平洋戦争後米軍板付基地に付属する春日原住宅地区が置かれた。隣接する道路一帯は通称「白木原ベース通り」と呼ばれ、米軍が撤退する昭和40年代頃まで賑わいをみせた。

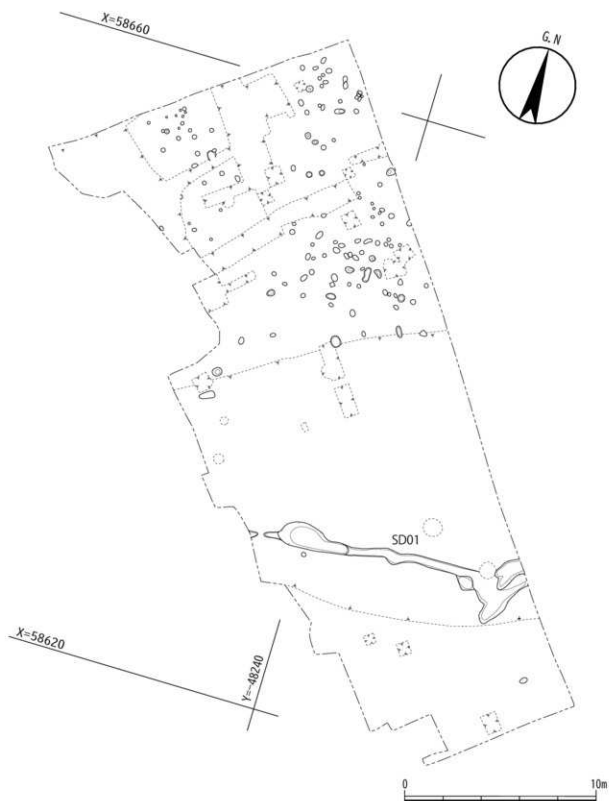


福岡市	大野城市	22. 原口遺跡	34. 此岡古墳群	46. 瓦田後田遺跡	55. 本堂遺跡
1. 井相田遺跡	11. 仲島遺跡	23. ヒケシマ遺跡	35. 原田遺跡	47. 古賀遺跡	56. 上園遺跡
2. 麦野B遺跡	12. 川原遺跡	24. 中・寺尾遺跡	36. 金山遺跡	48. 原ノ畑遺跡	57. 永福遺跡
3. 麦野C遺跡	13. 御笠の森遺跡	25. 森園遺跡	37. 金ヶ浦遺跡	49. 大道端遺跡	58. 末次遺跡
4. 雑餉隈遺跡	14. 宝松遺跡	26. 松葉園遺跡	38. 曲り目遺跡	50. 後原遺跡	59. 向川路遺跡
春日市	15. 村下遺跡	27. 御手洗遺跡	39. 笹原古墳	51. 御供田遺跡	60. 唐土遺跡
5. 駿河遺跡	16. 雑餉隈遺跡	28. 薬師の森遺跡	40. 釜蓋原遺跡	(九州大学筑紫地	61. 谷川遺跡
6. 駿河B遺跡	17. 御陵遺跡	29. 原口古墳群	41. 沙井川遺跡	区遺跡)	62. 天神田遺跡
7. 駿河E遺跡	18. 唐山遺跡	30. 雄子ヶ尾遺跡Ⅲ	42. 中ノ原遺跡	52. 池田・池之上	63. 水城跡
8. 立石遺跡	19. 善一田遺跡群	31. 雄子ヶ尾古墳群	43. 石勺遺跡	遺跡	
9. 先ノ原B遺跡	20. 王城山遺跡群	32. 雄子ヶ尾遺跡Ⅱ	44. 瑞穂遺跡	53. ハゼコ遺跡	
10. 春日公園内遺跡	21. 古野遺跡群	33. 雄子ヶ尾遺跡	45. 国分田遺跡	54. 梅頭窯跡群	

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ．調査の成果

1. 調査の概要



第3図 調査区遺構配置図 (1/200)

対象地では調査前の段階で鉄筋の建物が建っており、調査区を設定した区域の西半は、基礎による攪乱により遺構の確認ができない状況であった。調査区の東半においても従前の諸施設による攪乱がみられたが、部分的にピット群を確認している。調査区現況は平坦な地形であるが、旧地形は調査区中央で緩やかに南に下っており、これが溝の南側で立ち上がり、浅い谷状の地形を成すことが分かった。

主な遺構として、調査区南側で東西に走る溝1条を検出した。以下は、検出した遺構について述べる。

2. 遺構と遺物

(1) 溝跡

SD01 (第4図 図版1～4)

調査区の中央から南半で確認した谷地形の最深部に検出した小溝で、東西方向に流れる。溝は東端で氾濫により蛇行状に膨らみ、西端では土坑状に膨らむが、その中間が本来の本溝の形態を示すと思われる。幅0.6～1.5m、深さ0.1～0.4mを測り、長さ16mを検出した。溝は途絶えがちにはなるが、さらに調査区の西に延び、また、東端は第15次調査で同様な溝が検出されており、それに連続すると思われる。出土遺物は無い。

(2) ピット

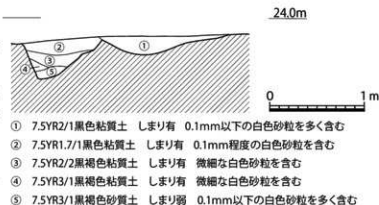
調査区の北半で集中して検出した。調査区中央部で確認した谷地形の西側に集中し、谷及びその南側では皆無である。ピット群は木の根によるものも多く、柱穴と思われるピットについても建物等にまともるものは無かった。出土遺物は無い。

(3) 出土遺物 (第5図 図版4)

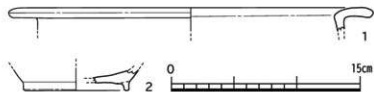
遺構からの出土遺物はないものの、表土掘削の際に弥生土器、土師器を確認している。

1は弥生土器の甕。口縁部の1/8程度が残存する。口縁部はくの字に短く屈曲し、内外面に横ナデ調整がみられる。復元径は29cmである。

2は土師器の杯。高台が貼り付けられ、内外面にナデ調整が施される。胎土は精良であるが、2～3mm程度の石英砂粒をわずかに含む。



第4図 SD01 東壁土層図 (1/40)



第5図 出土遺物実測図 (1/3)

IV. まとめ

後原遺跡は近世白木原村の一村、「本村」に比定されており、これまでに26次にわたる調査が行われてきた。未報告地点はあるものの、既往の調査により白木原地祿神社を中心とした近世集落の様相が明らかとなりつつあり、近世後期には地祿神社東～南東側に集落域、北西側に墓域が広がることがわかっている。

今回の調査地は遺構が希薄な遺跡南西の集落縁辺部にあたるものの、従前の第15次調査で確認された溝に接続する東西方向の溝SD01を確認することができた。これによりSD01は35m以上の長さがあると想定でき、東から西へ流水の痕跡がみられることから旧地形に沿ってなだらかに引かれた耕作用の水路であったと考えられる。また、調査区のさらに東側の第22次調査でも規模などの近い近世の溝SD06が検出されており、現状で断定はできないものの、仮に同一の溝とすると100m以上の規模となる長大な溝となる可能性もある。ただし本調査区ではSD01からの出土遺物はなく、第15次調査でも土師器の小破片のみのため時期特定には至っておらず、溝の正確な範囲と時期については今後の調査を待つ必要がある。

このほか、SD01は集落内から地形の低い場所を流れて集落外へと続くとともにSD01を挟んで谷状の地形になっており、調査区南半は集落に隣接した耕作地にあたる可能性がある。一方で墓域に近い調査区北半はピットが集中してはいるものの、建物など遺構にまとまるものはみられない。同じく墓域に隣接する20・22・25次調査でも同様の状況であることから、墓域と耕作地の境界には木立のようなものがあったことも考えられる。

出土遺物では、今回遺構からのものはなかったが、包含層から弥生時代中期後半の甕と平安時代の土師器が出土している。西側に広がる御供田遺跡とは対照的に後原遺跡では両時期の遺構は希薄であるが、古代以前の生活の痕跡がわずかながら認められることが改めて確認できたといえよう。

最後に、今回の調査では後原遺跡における土地利用の一端を垣間見ることができた。今後さらに遺跡の調査が進むことで、集落の全容が明らかとなることに期待したい。



第 6 図 後原遺跡土地利用概略図 (縮尺不同)

第 1 表 出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径⑤最大径 ※ (復元値) (残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	弥生土器	甕	表土割ぎ	① (29.0) ② (1.9)	頸部内面ナデ 他はヨコナデ	A: 3mm 以下の白色砂粒、石英を多く含む B: 良好 C: 内外 7.5YR 7/6 橙色~7.5YR8/4 浅黄褐色	
2	土師器	杯	表土割ぎ	② (1.8) ④ (8.4)	内外面ナデ	A: 4mm 以下の白色砂粒、石英を多く含む B: 良好 C: 内 5YR 7/6 褐色 外 5YR 7/4 に ぶい褐色~10YR8/2 灰白色	

写真図版



(1) 調査区全景 (西から)



(2) 調査区全景 (北西から)

図版 2



(1) 調査区北半完掘状況 (南から)



(2) 調査区南半完掘状況 (南から)



(1) SD01 完掘状況 (西から)



(2) SD01 完掘状況 (東から)

図版 4



(1) SD01 東壁土層堆積状況



(2) 調査風景



1



2

(3) 出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	うしろばるいせき7							
書名	後原遺跡7							
副書名	第26次調査							
巻次	7							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第213集							
編著者名	澤田 康夫・龍 友紀							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2-1 電話092(501)2211							
発行年月日	2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡 番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査 面積	調査原因
うしろばるいせき 後原遺跡	福岡県 大野城市 白木原一丁目	402192		33° 31' 53"	130° 28' 50"	2022年8月16日 ～11月25日	1,400 ㎡	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
後原遺跡 第26次調査	集落跡	古代	溝跡	弥生土器・土師器				
要約	後原遺跡は近世白木原村の一村、「本村」に比定されており、これまでに26次わたる調査が行われてきた。本調査では、調査区東側で南北に走る時期不明の溝1条を検出した。はっきりとした性格は不明であるが、従前調査と併せて水田域に水を引く灌漑水路の可能性がある。							

大野城市文化財調査報告書 第213集

後原遺跡7

令和6年3月31日

発行 大野城市

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷

〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号